

エッセイスト 近藤 節夫

どこの住まいの玄関と部屋にも入り口には決まってドア、扉が取り付けられているものだ。近年日本でも和風木造建築の文化と伝統、奥床しさを表していた純和風住宅が大分姿を消してしまった。長い歴史を誇る日本家屋の良さが失われつつあるのは、日本人にとっては何とも寂しい限りである。今でも純和風の名残のある住宅には、門構えに開き扉を、玄関や和室の出入り口には引き戸を、部屋の押し入れには、2枚扉の襖(ふすま)や障子の引き戸がはめられている。ところが、近年この2枚の引き戸の位置が間違っているケースをしばしば目にする。

昔は、小学校の木造校舎の教室入り口などには、2枚のガラス扉の引き戸があった。生徒たちは大掃除の際には、先生から正しく引き戸をはめるよう教わったものである。よく間違えるのは、2枚の引き戸の場合、左右いずれを手前にするかという和風住宅の基本的な決まりである。唐紙や障子が描かれた浮世絵を見ても分かるように、これは「右手前」が正しい。だが、昨今はこの決まりを知らない施工業者や住民が結構多くいるのだ。

由緒ある老舗旅館でさえ、指導が行き届かないせいか、部屋の障子を間違えて「左手前」のままのところがある。今では純和風旅館でさえ、従業員に日本家屋の基本的なしきたりを教えていないのだろうかと思うと悲しく心寂しくもある。かつて韓国の和風旅館に宿泊した時、入り口や押し入れに何か所かの引き戸が間違っはめられていた。余計なお世話だと思いつつも間違っのままの障子を放っておけず、無断で「左手前」を「右手前」に正しく入れ替えて旅館を後にしたことがある。

実は、近年工場で製造されるステンレス製の扉の中には、3枚扉以上の枠組みもあり、「左手前」にセットされたまま製造されたドア枠も増え、「右手前」も「左手前」も同じと誤解され、それが2枚引き戸の和洋折衷式の住宅にも「左手前」にセットされるようになった原因かも知れない。引き戸がどこに使われるかも知らず、工場で製造された「左手前」の半製品が「和風は右手前」の決まりが判らない施工業者や大工が漠然とそのまま使用するせいで、入り口に間違っ「左手前」の引き戸がセットされた和風旅館や、住宅、商店が目立つようになった。

ある有名な日本蕎麦チェーン店では、建設業者も店のオーナーも日本家屋の基本を知らなかったのか、全チェーン店の「引き戸」がすべて「左手前」になっており、暖簾をくぐる時一瞬戸惑うほどである。

ひよっとするとこの蕎麦店では箸を左手で持ってお蕎麦を食べる決まりなのかも知れない。

